

なお、ここで重要なことはハルトマンは決して過去も現在も著名な画家・建築家ではなかったものであり、そのため彼の遺した作品がまともに収集・研究されたことがなく、この曲とハルトマンの絵画の相関関係を指摘したのが1939年の音楽学者アルフレート・フランケンシュタインが最初であったということです。すなわち、1922年にオーケストレーションを行なったラヴェルはハルトマンの絵を観ていないと推測されるのです。また、一般的に「展覧会の絵」ということから誰もがルーヴル美術館などにある立派な額縁に納まった天井にも届くような大きな油絵などを連想しがちですが、ハルトマンが残した絵の大半は小さいものばかりで、紙の切れ端にスケッチしたものもあり、またその多くは水彩画や鉛筆画だったそうです。このようなハルトマンの絵を観ていたらラヴェルはもっと違ったオーケストレーションを施したかもしれません。つまり、ムソルグスキーの原曲のピアノ版を聴くにはハルトマンの絵は鑑賞の一助にはなるかもしれませんが、ラヴェルの編曲版を聴くには参考になることはあっても絶対に必要なことではないと言えます。

プロムナード (Promenade)

『プロムナード』は誰もが知っているあまりに有名なテーマ（我が家の電話機の呼び出し音が何故かコレ）。冒頭の2小節間を単音だけのピアノに弾かせるという、よく言えば斬新で常識を覆すもの、悪く言えば無謀、無知、非常識などいどの形容詞も当てはまることをムソルグスキーはやっけてのけています。音大の作曲科でこれを提出したら間違いなく突っ返されたことでしょう。なんせ片手どころか1本の指でも弾けるのですから。しかも、その2小節の後は和音の連続にオクターヴが挟まるという、およそ洗練とは程遠い楽節が続きます。ピアノ譜が出版されてからピアニストたちが弾こうとしなかった理由はここにあるのかもしれませんが。しかしその48年後、この譜面を見て最初の2小節間をトランペットに吹かせるということに着目したラヴェルの慧眼にはただ恐れ入るばかりです（ラヴェル以前のアレンジャーがここをどの楽器に奏させたかはわかりませんが・・・）。もしラヴェルがここにトランペットを採用しなければ、この『展覧会の絵』は今日これほどの人気を博したでしょうか。

1. グノーム (Gnomus)

この曲に相当するハルトマンの絵画は現存していません。ハルトマンの遺作展のときに作成されたカタログに「グノーム、子供の玩具のデッサン。・・・クリスマスパーティのツリーの飾り」という作品が記されているため確かに存在はしていたと思われませんが、全く失われたか、題名のない絵のどれかに該当するかのどちらかと言えます。「グノーム」とはロシアの伝説に登場する「小人、土の精」とされ、スタノフは「胡桃割人形のようなもの」と手紙に書いています。掲載した絵は「グノーム」と推測されるものです。しかしこの可愛らしい姿を見ると、威嚇的でグロテスクなモチーフが繰り返されるこの曲のイメージからは少々遠いように思えます。変ト長調という珍しい調（F音以外にはすべて♭がつく）で書かれているこの曲は、まずグロテスクな動機で小人の奇妙な格好で歩く様を表現します。次いで重々しい足取りで跳躍する五度の和音が進行しますが、途中から下降する半音階が加わります。この下降する音階はモーツァルトの歌劇『ドン・ジョヴァンニ』、ワーグナーの楽劇『ニーベルンクの指輪』、プッチーニの歌劇『ラ・ボエーム』などでも出てきますがヨーロッパでは伝統的に「死」を意味する音型とされています。ムソルグスキーは西欧音楽に背を向けていた国民主義者とするならば果たしてここで「死」（たぶんハルトマンの死）を意識したかどうかは俄かに断定はできませんが、この音楽からは悲痛な慟哭が聴こえてきてなりません。



プロムナード (Promenade)

変イ長調で書かれていて、冒頭の力強さとはうって変わってスラーがかかった優しい表情の曲になっています。

2. 古城 (Il vecchio castello)

この題名の絵は遺作展のカタログには載っていません。スタノフは「中世の城。その前では、吟遊詩人が唄っている」と書いていて、ムソルグスキーはこの曲だけイタリア語でタイトルを書いていることから、ハルトマンがイタリアを旅したときに書いた城の絵であろうと推測し、いくつかの絵が候補が挙がっています。嬰ト短調6/8、シチリアーノのリズムが延々続く中を甘美な旋律がわずかに変化しながら繰り返されます。ラヴェルはファゴットとアルト・サクソを使って古びた響きに加えて哀愁を漂わせることに成功しています。

